



TITLE:

京大広報 No. 579

AUTHOR(S):

京都大学広報委員会

CITATION:

京都大学広報委員会. 京大広報 No. 579. 京大広報 2003, 579: 1467-1484

ISSUE DATE:

2003-05

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/196522>

RIGHT:



京大広報

No. 579

2003. 5

目次

〈大学の動き〉

- 部局長の交替……………1468
新入生向けガイダンスの実施……………1468

〈部局の動き〉

- 寄附講座「創薬神経科学講座」の設置……………1469

〈栄誉〉

- 柳田充弘生命科学研究科教授が恩賜賞・日本
学士院賞を受賞……………1469
深谷賢治理学研究科教授が日本学士院賞を
受賞……………1470

〈寸言〉

- ゆとり 安福照嘉……………1471

〈随想〉

- 安全と規制 名誉教授 西原英晃……………1472

〈洛書〉

- フィールドからの発想 河野泰之……………1473

〈資料〉

- 平成15年度入学試験諸統計……………1474
平成14年度教育実習実施状況について……………1478

〈計報〉

- ……………1479

〈話題〉

- 原子炉実験所、創立40周年記念

- オープンキャンパスを開催……………1480

〈お知らせ〉

- 平成15年度創立記念行事音楽会の開催……………1481

- 桂キャンパスへの工学研究科移転に伴う

- 本部構内の交通規制について……………1482

- 平成15年度原子炉実験所の

- 学術公開日について……………1484

〈日誌〉

- ……………1484

〈編集後記〉

- ……………1484



まもなく本格的な移転が始まる桂キャンパス
—関連記事 本文 1482 ページ—

京都大学広報委員会

<http://www.kyoto-u.ac.jp/>

大学の動き

部局長の交替

防災研究所長

井上和也防災研究所教授（水災害研究部門担当（都市耐水論））が、入倉孝次郎防災研究所長の任期満了に伴う後任として、5月1日付けで任命された。任期は平成17年3月31日まで。



新入生向けガイダンスの実施

本学における全学共通教育（教養教育）を全学的立場から企画運営し、その責任組織として本年4月1日に設置された「高等教育研究開発推進機構」が、教養教育の改善・充実のための取り組みの一つとして、新入生向けのガイダンスを初めて企画し、4月2日（水）から4日（金）までの3日間、全学部（10学部）の新入生（2,849名）を対象とした「全学共通教育にかかる新入生向けガイダンス」を実施した。

このガイダンスは、新たに導入された遠隔講義システムにより4会場同時進行で行われ、冒頭、初代機構長の赤岡 功教授が、本学の歴史及び「自由の学風」に根ざした教育理念、さらには学生個々人の自発自啓を基本精神とした教養教育の目的・目標等を紹介した。引き続き、副機構長の林 哲介教授から総合大学としての特徴を生かして各学部、研究科、研究所及びセンターが提供する725科目に及ぶ多様な全学共通（教養）科目について、その適

正な履修方法の詳細な説明があった。

その後、事務担当者による履修に当たっての事務手続きの説明、学生生活のためのオリエンテーションがあり、新入生はメモをとるなど真剣な表情で聞き入っていた。

今回のガイダンスは好評のうちに終了し、来年度以降も内容を一層充実したものにして、引き続き開催する予定である。

なお、全学共通教育に関する事務を円滑に行うため、事務局に小川清四郎企画調整官を部長とする共通教育推進部並びに共通教育推進室を本年4月1日に設置した。



部局の動き

寄附講座「創薬神経科学講座」の設置

4月1日、大学院薬学研究科の寄附講座「創薬神経科学講座」が設置された。

概要は次のとおりである。

- 1 部 局 名 薬学研究科
- 2 名 称 創薬神経科学講座
- 3 寄 附 者 エーザイ株式会社
代表取締役社長 内 藤 晴 夫
- 4 寄 附 金 額 総額 250,000,000 円（分割納付）
- 5 設 置 期 間 平成15年4月～平成20年3月（5年間）
- 6 担 当 教 員
教授相当 杉 本 八 郎
助教授相当 新 留 徹 広
助手相当 木 原 武 士

7 研究目的

神経科学領域を基盤とした創薬科学研究を行い、難治性神経疾患を含む中枢神経疾患を標的とした研究を推進し、基礎と応用をつないで独創的医薬品の創製に結びつく基礎的試料を提供するとともに、創薬研究者の育成にも貢献する。

8 研究内容

神経科学、薬理学、生化学を基盤とした研究の実施により、諸種中枢神経疾患の病態の分子・細胞レベルでの解明を行い、ゲノムと生理活性物質の両面から病態制御に関わる生体機能分子を解析し、中枢神経疾患治療薬に関連した創薬シーズを探索する。

9 研究課題

中枢神経疾患の病態と関連する新規遺伝子をターゲットとする研究により、創薬研究にブレークスルーをもたらすことを可能にする研究標的を開拓する。さらに、生体内もしくは天然物中に存在する未知の生理、薬理活性物質を探索するとともに、新規な神経変性疾患治療薬を創出するために必要な種々の薬物効果評価系を構築する。



栄 誉

柳田充弘教授が恩賜賞・日本学士院賞を、深谷賢治教授が日本学士院賞を受賞

このたび、柳田充弘教授が恩賜賞・日本学士院賞を、深谷賢治教授が日本学士院賞をそれぞれ受賞されることになりました。

授賞式は、6月上旬日本学士院で行われる予定です。

以下に両教授の略歴、業績等を紹介します。

柳田充弘教授は、昭和39年東京大学理学部を卒業され、本学に着任されるまでに、スイス国ジュネーブ大学、イタリア国ナポリ市国際・遺伝生物物理学研究所、東京大学医科学研究所、米国メリーランド州立大学等、複数の多彩な研究機関で研鑽を積まれた。



昭和46年京都大学理学部助教授、同53年教授に昇任された。その後、平成7年大学院理学研究科に配置換え後、同11年新設された京都大学大学院生命科学研究科に配置換えとなり、同13年国立遺伝学研究所細胞遺伝研究系教授を併任し、現在に至っている。

柳田教授の専門は分子細胞生物学であり、中でも真核生物の染色体分配機構の解明に焦点を絞った研究が続けている。分子レベルの解析が当時全く手つかずという状況の中で、モデル系として単細胞真核生物である分裂酵母にいち早く注目された慧眼が、後の研究の飛躍的な発展に通じた。遺伝学、分子生物学、生化学、細胞生物学等の複合的な視野から精

力的な解析を行ない、遺伝情報伝達に関わる数多くの因子を新規に同定され、さらには、因子間の相互作用を介して遺伝情報の実体である染色体の機能を遺伝子レベルで明らかにされてきた。同教授の解析方法の特色は、生命現象を俯瞰する際に、顕微鏡等から得られる巨視的な形態情報を常に分子レベルに還元して捉える点である。そのアプローチは先駆的な解析技術を自ら開発・駆使することにつながり、この分野における技術面での貢献も枚挙に暇がない。こうした一連の研究結果から、研究開始当初はほとんど未解明であった本現象が、今日我々が理解するまでに明らかになった過程には、同教授の貢献が大であることは世界中の研究者が等しく認めるところである。

これらの業績に対し、平成12年東レ科学技術賞、同13年朝日賞、同14年上原賞、同14年紫綬褒章が授与された。また、平成7年ヨーロッパ分子生物学機構(EMBO)外国人会員、同12年英国王立協会外国人会員に選出されている。

(大学院生命科学研究科)

深谷賢治教授は、昭和56年東京大学理学部を卒業、同大学大学院理学研究科修士課程を同58年に修了し、同大学理学部助手となり、同61年に理学博士号を取得後、同61年から同大学教養学部助教授、平成3年理学部助教授を経て、同8年から京都大学大学院理学研究科教授に就任され、現在に至っている。



深谷教授の専門は幾何学で、幾何学研究全般が今回の受賞の対象となった。

ドーナツ形がだんだん細くなって、最後には太さ0の針金のような現象の高次元での類似が、リーマン多様体の崩壊で、同教授のリーマン幾何学における研究の中心である。同教授は、2つの空間の近さを計る概念であるグロモフ・ハウスドルフ距離を用いて、空間の曲がり方についての条件のもとで(ニューヨーク大学クーラン研究所チーガー教授、同研究所及びフランス高等科学研究所(IHES)グロモフ教授の研究と補い合っ)て崩壊現象のほぼ完全な記述を行い、九州大学山口教授らとともにその概非正曲率多様体の高次ホモトピー群の消滅、概非負多様体の基本群の冪零性の証明への応用を与えた。

また、ゲージ理論・シンプレクティック幾何学・

位相的場の理論についての同教授の研究は、無限次元空間の幾何学にかかわるものである。位相幾何学の重要な方法は、幾何学的対象に代数的な対象を対応させて、代数を用いて幾何を行うことで、有限次元の場合には、ホモロジー・ホモトピーなどの手法が開発されている。同教授の研究では、無限次元のホモロジー論であるフレアーホモロジーを足がかりに、それを越えた無限次元の種々の位相幾何学的な構造が構想され、実現されつつある。これは、位相的場の理論でのホモロジー代数的枠組みの適用の先駆けとなった。深谷カテゴリーと呼ばれるカテゴリーの構成がその一例で、素粒子論で研究されている超弦理論に端を発するホモロジー的ミラー対称性予想(フランス高等科学研究所(IHES)コンセビッチ教授による)で重要な役割を果たしている。

さらに、関数解析的非線形偏微分方程式を用いた、種々の位相的場の理論の基礎付けにも同教授の寄与が大きく、その一つの応用として、周期ハミルトン力学系の周期軌道に関するアーノルド予想の一つの形が、同教授と北海道大学小野教授によって解決されている。

以上、同教授の研究は、幾何学、トポロジー、数理物理などの幅広い分野に渉るもので、その画期的業績と深い洞察は国際的に高く評価されている。

(大学院理学研究科)

寸言

ゆとり

安福 照嘉



私が京都大学に入学したのは昭和23年、未だ戦後疲弊の面影が濃い年代だった。外食券がなければ食堂で食べる事も出来ないし、醤油だけで味付けした顔の映るような汁一杯で雑穀混じりのお椀一杯の飯をかきこむ時代だった。大学も暖房はなく、京都特有の冷えこみは少々辛かったが、生まれて始めて家から開放されて下宿生活の自由を心から謳歌出来た時代でもあった。法経第一教室の暖房のない寒さは格別のものだったが、滝川幸辰先生の刑法講義に出席したある日、ある学生がオーバーコートを着たまま座っているのを見咎められて、退場を命じられた。随分厳しい先生だなと印象に残った。

中谷 実先生のゼミで金融論を勉強した縁もあり、昭和26年卒業後三和銀行〔現 UFJ 銀行〕に就職した。就職前までは銀行は3時に扉を閉めるから、4時頃には帰れる楽な商売だとばかり思っていたほど現実社会にはうとい自分だったが、入行早々からやたらと残業が多いのに驚き、よほど辞めようかなどと考えたが、さりとて辞めても特にやりたい仕事もないのでそのままずると銀行に居座ることとなった。

戦後の占領下経済から徐々に自立経済の歩みが進む中、銀行も海外に目を向け始めた時代でもあった。当時は未だ財閥は解体されたままだったが、再統合の気運が醸成されつつあり、戦後日本経済復興の要となった輸出産業育成と共に外国為替業務は邦銀にとりぜひとも進出したい業務だった。そのような環境下、私はニューヨークのある大手米銀へトレイニーとして一年間派遣される事となった。当時日本の外貨準備は底を這う時代で渡航許可条件も極めて厳しい頃、トレイニーの給与は全て先方負担が条件で、渡航用外貨も飛行機は認められず船賃なら認めるということで、日本銀行の窓口へ日参してやっと外貨割当を認めて貰った。1953年のことである。

初めてのアメリカの印象は強烈だった。戦勝国としての誇りと自信がそうさせた面もあるが、当時会ったアメリカ人は概してだらかで、開放的で親切だった。アメリカでもやっと黑白テレビが家庭に普

及し始めた頃で、今晚はテレビを観に来ないかと誘われた素朴な時代が懐かしい。トレイニーとして最初に配属された外国為替部門は部員の8割が外国人で第二次大戦の戦火を逃れて米国にやってきたヨーロッパ、特にラトビア、リトアニア、ポーランド等東欧地域の人間が多くて、訛りの強い英語には往生したが、結構学歴も高い連中が安い給料で良く働いていた。戦後アメリカの発展を大きく支えたのがこれら移入外国人の頭脳と勤勉さであったのは疑い無い事実である。

1953年頃のアメリカと私が何度かのアメリカ勤務を終えて日本に帰ってきた1990年代の終わりと比べてみると、アメリカも日本も物質的には本当に豊かになったと思う。しかしそれに比して人の心はむしろ貧しくなったように感じられる。今度のイラク戦争をめぐるアメリカの対応をみてもミサイルと爆弾を打ち込むのは速かったが、七千年の歴史あるメソポタミヤ文化遺産を守ること等頭の片隅にも無かった様子である。第二次大戦当時京都と奈良の文化遺産を守るために爆撃を思い止まらせたアメリカの良識は何処へ姿を消したのだろうか。日本もすっかり自信を喪失した経営者に出来るのはリストラの四文字しかないのだろうか。東西ともに心にゆとりのある人々が少なくなったように感じられる。

京都大学卒業生として海外に生活して感じたことを若干述べさせて頂く。他の大学卒業生が夫々母校の同窓会を中心に色んな形で結束或いは緊密な接触を保っているのに比べて京都大学出身の同窓会はその数、会員数、活動状況は弱いように感じられる。これは決して善悪の問題ではない。私自身以前から地縁、血縁で集団を作る人々を余り快くは思っていない。これは未開文化の象徴かもしれない。その点では京都大学の伝統はむしろ淡々とした人間関係を良しとする風潮が今も流れていると感じている。私はこれを美德だと思っている。しかしアメリカのアイビースクールと称せられる連中の同窓会活動を見ていると、現実には哲学的だけで片付かない社会が存在していることも否定できないと考えるようになった。

(やすふく てるよし ベリングポイント株式会社顧問 昭和26年経済学部卒業)

随想

安全と規制

名誉教授 西原 英晃



長年、原子力基礎研究に携わってきた者として、原子力安全をめぐる昨今の「不祥事」には情けない思いを抱いている。大学を退職してからの数年来、日本原子力学会の倫理規程の作成とそのフォローに関わっているが、大きな文明の変動期に出くわしているようで、専門職の倫理を考える際に必要なバランス感覚を維持するのが難しく、ずっしりとした社会の重みとモーメンタムを感じている。原子力に限らず科学技術の進展には先導的、切り羽的なインセンティブが肝要であり、大学では先導的知の創造の喜びを次世代に継承してゆくことが主要な責務のひとつである。

原子力のように本来的にリスクを伴う分野では、「安全」が何よりのキーワードであり、十分に醸成された「安全文化」のなかで研究開発を推進して行かなければならないのだが、歴史はその順番に進展してきたわけではなく、今も試行錯誤が続いている。システムが今のように複雑でなかった原子力開発の黎明期には、「安全」を見通すことは比較的容易であり、また技術的「安全」を標榜することで社会的「安心」を得るために、今では神話となった「絶対安全」を護符として物事が進められた。ここでシステムと言ったのは設備本体だけでなく、その運用に当たる制度などを含めてのことである。その後システムが複雑化し、このパラダイムが破れ、対応に苦慮しているのが今の状況であろう。古いパラダイムはステークホルダーが限定されていたから可能であったのかも知れない。

7年前の12月にナトリウム漏れ事故で高速増殖炉「もんじゅ」が停止し、その翌月、関西の原子力関係者が新年の集まりを持ったおり、筆者は原子力技術者を教育してきた立場で、原子力における倫理教育を怠ってきたことに対して反省する意味の言葉を述べた。もんじゅ事故ではナトリウム漏洩の際に撮

したビデオを組織的に隠していた。ちょうどそのころから、技術的なモラル・インテグリティの破綻がわが国の各分野で見られるようになり、工学教育に「倫理」を導入することの必要性が議論されるようになった。

モラルは規範レベルで倫理として論じられ、そこではバランスが指針となる。調和のとれた価値判断が重要、というわけである。価値基準のなかで最も重視しなければならないのは人々の福祉・健康・安全であるが、原子力のように複雑系になってしまったシステムでは、どの位安全であれば十分安全なのか、というようなことについての社会的コンセンサスはなかなかとれない。ひとつには、科学技術の発展に不可欠な先導性は、不可避免的にバランスを破る性格のものだからであろう。

バランスを保つには、個人の常識レベル、規範化された倫理レベル、国の法令レベルなどの段階がある。さらにはこれを横につなぐ二国間や国際的な取り決めも重要な役を演じよう。工学に限らず科学技術を展開するためにはこれらのレベルが弾力的に機能しなければならない。昨年発覚した東京電力の原発検査データ不正事件に絡んで、経済産業省の原子力安全・保安院は、原子力安全委員会の勧告を受けて、原子力事業者の自主点検を法定点検に格上げして義務化することにした。今後、法定の自主点検記録に改ざんがあった場合は罰則の対象となる。こうすれば責任の所在はより明確になるが、それが当事者の倫理レベルでの意識を弱めることにならなければ、と危惧している。法令レベルでの安全規制が強化されると、自主点検の本来的な精神が損なわれてきてしまう。わが国の伝統的体質であるパターンリズムは自律的「安全文化」育成の方向に逆行することにならなければ幸いである。

(にしはら ひであき 元原子炉実験所教授、平成10年退官、専門は原子力工学・技術倫理)

洛書

フィールドからの発想

河野 泰之

2年前からミャンマーでの調査研究を始めた。20年前にタイで始まった私の農業・農村研究は、ベトナム、ラオス、ミャンマーと手を広げ、東南アジア大陸部ではカンボジアを残すのみとなった。ミャンマーでの研究で与えられたテーマは、市場経済の導入を農業分野において促進するためにどのような政策・制度の改変を優先させればよいかを日緬両政府に提言しろ、というものであった。経済学者が中心となった共同研究である。



私はこのテーマを少し読み替えた。ミャンマーの農業生産様式とそれを支える農村の社会経済システムはどのような過程を経て形成されてきたのか、その結果として今日のミャンマー農業はどのような条件に規定されているのか、について考えようと思った。私の時間的な視野は50年から100年である。イギリス植民地期を出発点として、独立直後の比較的自由だった時代、軍事独裁期、そして近年の外国資本が流入するようになった時代を追跡することである。国レベルでの政策や制度の変更に農村の仕組みや営農にどのような影響を与え、農村や農業の変容に政策や制度がどのように追従してきたのかを、フィールドを歩きながら思い描いた。経済学者が何を変えて効果が効果的なのかを分析するのに対して、私は、社会がどう変わろうとしているのか、社会はどのような変化を受け入れる用意があるのかを見ようとした。両者を融合することにより、ミャンマー農業が近未来に向けて歩んでいく道筋が見えてくるだろう。

今年の2月には、短期間ではあるが、インドネシア・ジャワ島の農村に滞在する機会があった。このときの研究テーマは高齢者をめぐるセーフティ・ネット。私の課題は、それを生業や生活環境との関係から考える、というものであった。医学や経済学を専攻する方々との共同研究である。東南アジアでも少子高齢化社会が目前に迫りつつある。同時に市場経済が浸透し生活スタイルが変わり、いわゆる伝統的な農村社会が崩れ始めている。とはいえ政府の

財政基盤は弱く、先進国の高齢者福祉モデルをそのまま発展途上国に適用することはできない。それでは、どのようなオルタナティブ・アプローチがあるのか。

医学者が高齢者の健康状態を診断し、経済学者が高齢者世帯の経済状態を聞き取り、私が高齢者の生業活動や生活スタイルを記録する。そこで、これら3種類の情報をどう統合するか。高齢者にとって十分な権限をもって生きることが望ましいことであり、セーフティ・ネットとはその権限を維持する仕組みである、と考えてみようと思っている。権限には、身体的、経済的、社会的と3つの側面がある。社会的権限とは家族を含む他人との関係性に基づく権限である。こう考えることにより、健康であることと、経済的に豊かであることと、子供が多い、あるいは社会的に影響力があることの相互補完的な作用を取り込んで高齢者の生き方を考えることができるし、オルタナティブ・アプローチを導き出す手がかりも与えてくれると期待している。

ジャワ島での調査の直前にラオスのヴィエンチャンを訪問した。これは、東南アジア大陸山地部を対象として、慣習的な土地利用において維持されてきた生物多様性保全と持続的農林業の両立を近代的な土地制度のもとでどのように実現するか、をテーマとする研究プロジェクトである。生態学と農学と経済学と政治学、さらに人類学をも巻き込んだテーマである。

いろいろな研究分野を繋いで積み重ねて今日的な課題に取り組む、という研究も結構面白いものである。自らが特定の分野の研究者である、という意識を少し破ってフィールドに立ってみよう。そしてフィールドの実態と真摯に対峙してみよう。目の前の人がどういう背景で何を考え何をしようとしているのか、自然や文化や経済や国家がどういう背景で形成されどう動こうとしているのか。細分化された知恵をどのように統合するか。発想の原点はフィールドにある。

(この やすゆき 東南アジア研究センター助教授)

資料

平成15年度入学試験諸統計

1. 募集人員・志願者数・合格者数・入学者数等調

学部・日程		募集人員	志願者数	第1段階選抜合格者数	受験者数	合格者数	入 学 辞退者数	追 加 合格者数	入学者数
総合人間 学 部	前期(文系)	55 ^人	234 ^人	229 ^人	227 ^人	55 ^人			135 ^人
	前期(理系)	55	234	222	222	56			
	後 期	20	380	320	196	24			
文 学 部	前 期	190	592	592	589	193	1		224
	後 期	30	390	301	146	32			
教育学部	前 期	40	138	138	138	40			62
	後 期	20	137	137	93	22			
法 学 部	前 期	320	893	892	883	325			357
	後 期	20	388	340	125	32			
経済学部	前期(一般)	160	534	534	525	160	4		234
	前期(論文)	50	305	251	250	50			
	後 期	20	560	560	348	28			
理 学 部	前 期	271	956	927	919	271	2	2	301
	後 期	30	1,105	1,084	764	30			
医 学 部	前 期	90	440	399	390	90			100
	後 期	10	196	149	110	10			
薬 学 部	前 期	70	307	307	300	70			81
	後 期	10	201	201	138	11			
工 学 部	前 期	857	2,184	2,182	2,162	861			961
	後 期	98	888	783	384	100			
農 学 部	前 期	233	665	665	657	244	3		312
	後 期	67	818	818	536	71			
小 計	前 期	2,391	7,482	7,338	7,262	2,415			
	後 期	325	5,063	4,693	2,840	360			
合 計		2,716	12,545	12,031	10,102	2,775	10	2	2,767

〔外国学校出身者のための選考の実施結果（外数）〕

学 部	募集人員	志願者数	第1次選考合格者数	受験者数	合格者数	入 学 辞退者数	入学者数
法 学 部	20名以内	30 ^人	21 ^人	13 ^人	9 ^人	1 ^人	8 ^人
経済学部	10名以内	24	15	13	10		10

〈工学部・農学部学科別内訳〉

学部・日程		募集人員	志願者数	第1段階選抜合格者数	受験者数	合格者数	入 学 辞 退 者 数	追 加 合 格 者 数	入学者数
工 学 部	前期	857 ^人	2,184 ^人	2,182 ^人	2,162 ^人	861 ^人			961 ^人
	後期	98	888	783	384	100			
地球工学科	前期	166	401	401		166			185
	後期	19	246	228		19			
建 築 学 科	前期	72	236	236		73			81
	後期	8	95	65		8			
物理工学科	前期	211	494	493		213			238
	後期	24	190	190		25			
電気電子工学科	前期	117	319	319		117			130
	後期	13	103	78		13			
情 報 学 科	前期	81	197	196		81			91
	後期	9	84	72		10			
工業化学科	前期	210	537	537		211			236
	後期	25	170	150		25			
農 学 部	前期	233	665	665	657	244	3		312
	後期	67	818	818	536	71			
資源生物科学科	前期	75	—	—		78			97
	後期	19	148	148		19			
応用生命科学科	前期	38	—	—		40			51
	後期	9	106	106		11			
地域環境工学科	前期	26	—	—		27	1		37
	後期	11	226	226		11			
食料・環境経済学科	前期	23	—	—		25			34
	後期	9	106	106		9			
森林科学科	前期	45	—	—		47	1		59
	後期	12	194	194		13			
食品生物科学科	前期	26	—	—		27	1		34
	後期	7	38	38		8			

(備考) 1) 法学部・経済学部の外国学校出身者のための選考を除く。
2) 総点については、前期・後期共合格発表時のものである。

2. 合格者 最高点・最低点(総点) 調

学 部	日 程		満 点	総 点		
				最 高 点	最 低 点	平 均 点
総 合 人 間 学 部	前 期	(文 系)	800	578.66	481.83	515.48
		(理 系)	800	605.25	472.75	507.33
文 学 部	後 期		800	590.00	515.66	536.00
			700	553.41	429.83	454.09
教 育 学 部	前 期		700	501.00	427.75	446.64
			900	631.50	529.16	568.02
法 学 部	後 期		900	595.66	538.58	555.19
			750	602.00	449.50	488.25
経 済 学 部	前 期	(一 般)	500	406.00	369.50	381.96
		(論 文)	800	575.50	462.75	494.98
理 学 部	後 期		1,000	688.33	484.16	533.27
			950	666.95	539.00	574.74
医 学 部	前 期		650	535.00	388.00	426.70
			400	319.00	245.00	266.63
薬 学 部	後 期		1,250	1,064.50	914.75	970.49
			1,400	1,072.20	942.20	991.87
工 学 部	前 期		950	752.00	616.25	659.29
			950	704.12	610.37	641.82
農 学 部	後 期		1,000	824.75	575.83	641.45

工学部学科別	日 程		満 点	総 点		
				最 高 点	最 低 点	平 均 点
地 球 工 学 科	前 期		1,000	824.75	581.66	637.09
建 築 学 科			1,000	768.33	582.83	637.69
物 理 工 学 科			1,000	799.58	595.50	656.45
電 気 電 子 工 学 科			1,000	781.91	589.58	639.51
情 報 学 科			1,000	775.66	599.91	659.17
工 業 化 学 科			1,000	788.75	575.83	625.32
地 球 工 学 科	後 期		1,100	876.00	714.25	751.50
建 築 学 科	後 期	(A 選 抜)	500	358.50	275.00	301.25
		(B 選 抜)	500	318.00	286.00	301.88
物 理 工 学 科	後 期		1,100	866.25	720.50	758.71
電 気 電 子 工 学 科			1,000	775.04	610.42	680.35
情 報 学 科			300	300.00	212.00	247.80
工 業 化 学 科			1,000	621.00	544.50	579.28

農 学 部	前 期	1,050	818.41	644.00	693.68
	後 期				

農学部後期学科別	日 程		満 点	総 点		
				最 高 点	最 低 点	平 均 点
資 源 生 物 科 学 科	後 期		810	537.30	440.36	470.74
応 用 生 命 科 学 科			810	579.03	441.63	480.15
地 域 環 境 工 学 科			900	691.50	555.50	595.86
食 料 ・ 環 境 経 済 学 科			800	615.99	498.33	532.55
森 林 科 学 科			810	502.86	463.83	477.23
食 品 生 物 科 学 科			290	257.05	226.25	237.53

3. 志願者・入学者 出身高校等所在都道府県別調

上段…志願者数
下段…入学者数

都道府県		学 部										計
		総合 人間	文	教育	法	経済	理	医	薬	工	農	
北海道		19 2	11 1	6 3	15 3	12 2	40 4	12 1	7 3	35 10	17 3	174 32
東 北	青 森	3 1	4 1	1 1	4 1	1 3	14 3	2 1		11 4	4 10	44 10
	岩 手	3 3	3 3		5 1	5 2	15 3	2 1		2 1	1 5	36 5
	宮 城	10 3	8 3	2 1	3 1	15 2	11 3	7 2	1 1	16 1	11 2	84 18
	秋 田	3 2	5 2	2 2			7 1	1 1		6 2	2 1	26 5
	山 形		6 1		1 1	3 1	5 1			1 1	2 3	18 3
	福 島	4 1	2 1		2 1	8 2	24 2	1 1	2 1	3 1	9 1	55 5
	茨 城	10 1	8 2	5 3	15 3	9 3	34 2	8 1	6 1	19 3	9 2	123 14
関 東	栃 木	7 2	4 2	2 2	7 1	5 1	18 1	3 1	4 1	13 4	6 1	69 12
	群 馬	2 1	10 3	1 1	5 1	7 1	14 3	2 1		10 4	6 2	57 15
	埼 玉	21 2	18 1	4 1	10 1	30 1	38 4	3 1	14 2	26 3	23 3	187 15
	千 葉	23 4	16 1	6 1	13 2	48 4	74 6	7 1	12 2	38 9	31 7	268 36
	東 京	102 13	74 10	12 1	47 8	112 14	223 24	51 3	35 3	84 20	105 10	845 106
	神奈川	34 2	23 3	6 1	12 2	44 5	63 2	24 1	11 2	44 13	49 5	310 35
	新 潟	9 2	9 2		5 2	7 1	22 3	5 1	2 1	14 5	8 2	81 17
中 部	富 山	1 2	9 2	1 1	5 2	9 1	8 1	3 1	5 2	10 1	6 1	57 9
	石 川	5 1	12 5	3 2	18 6	7 2	19 3	3 1	3 1	30 14	8 14	108 34
	福 井	4 5	14 5	3 4	11 2	8 2	9 2	7 2	3 1	34 15	9 2	102 33
	山 梨	8 1	3 1	2 1	3 1	5 1	10 4	1 1	4 1			36 7
	長 野	6 1	11 3	2 1	13 1	15 2	26 1	8 1	6 12	32 6	21 6	140 26
	岐 阜	14 4	23 9	1 1	26 8	24 4	32 8	2 1	9 15	50 3	9 3	190 51
	静 岡	27 8	20 3	2 1	20 6	21 3	49 9	10 1	6 1	76 20	20 6	251 57
	愛 知	46 6	59 19	21 4	83 22	55 19	127 24	38 5	39 5	154 61	106 27	728 192

都道府県		学 部										計
		総合 人間	文	教育	法	経済	理	医	薬	工	農	
近畿	三重	163	204		229	193	247	93	7	4917	133	17949
	滋賀	166	238	61	182	255	448	91	183	9625	4411	29970
	京都	556	9118	285	15948	18524	14123	6318	538	384104	18538	1,344292
	大阪	12423	14628	5813	24062	22541	27340	939	7915	627199	27859	2,143489
	兵庫	7510	8728	196	15852	15632	18228	10729	4915	343121	15031	1,326352
	奈良	466	5213	133	8934	11223	6718	3410	376	346104	9823	894240
	和歌山	63	299	93	178	289	246	103	112	5626	3510	22579
中国	鳥取		82	21	15	171	21	1	82	51	498	
	島根	2	11	21	21	102	33	2	63	41	338	
	岡山	132	131	327	168	332	85	103	5622	186	19749	
	広島	163	234	41	4614	295	549	131	830	238	28275	
	山口	92	61	188	922	224	31	61	254	42	10322	
四国	徳島	7	31	21	132	133	93	1	110	175	8725	
	香川	122	142	227	187	233	94	91	1010	125	15734	
	愛媛	5	216		61	132	319	112	511	143	14634	
	高知	4	51	34	41	32	122	41	49	241	1016	
九州	福岡	223	398	155	5013	245	707	142	244	10323	417	40277
	佐賀	1	41	62	41		112	51	11	166	314	5114
	長崎	7	62	11	61	93	162	21	41	41	71	6211
	熊本	125	123	52	135	153	243	21	43	143	163	11727
	大分	21	41		82	21	111	11		52	75	4013
	宮崎	4	4		11	33	112	21	21	91	41	404
	鹿児島	143	53	113	163	143	253	162	51	165	123	13426
	沖縄	71	4	32	21	110	21			51	21	364
検定		81	102		111	223	351	112		113	19	12911
その他		41				2		2				81
合 計		848135	982224	27562	1,281357	1,399234	2,061301	636100	50881	3,072961	1,483312	12,5452,767

(備考) 外国学校出身者のための選考を除く。

高等専門学校3年修了者は各都道府県別欄に含む。

4. 志願者・入学者 入学資格取得年別調

学 部	志 願 者						入 学 者					
	総数	現 役	浪 人				総数	現 役	浪 人			
		15. 3 卒	14. 3 卒	13. 3 卒	12. 3 卒	11. 3 以前卒		15. 3 卒	14. 3 卒	13. 3 卒	12. 3 卒	11. 3 以前卒
総合人間学 部	人 848	人 513	人 250	人 45	人 19	人 21	人 135	人 71	人 49	人 12	人 1	人 2
	検 8 他 6	検 3 他 2	検 1 他 2	検 1 他 2	検 2	検 1	検 1 他 1		他 1	検 1		
		60.5%	39.5%					52.6%	47.4%			
文 学 部	982	630	271	46	16	19	224	139	70	8	3	4
	検 10	検 1	検 2	検 4	検 2	検 1	検 2	検 1	検 1			
		64.2%	35.8%					62.1%	37.9%			
教育学部	275	157	88	20	5	5	62	32	27	2	1	
		57.1%	42.9%					51.6%	48.4%			
法 学 部	1,281	811	379	49	8	34	357	200	142	13		2
	検 11	検 5	検 1			検 5	検 1	検 1				
		63.3%	36.7%					56.0%	44.0%			
経済学部	1,399	708	478	118	28	67	234	112	104	14	1	3
	検 22 他 3	検 10 他 1	検 5	検 2		検 5 他 2	検 3	検 1	検 2			
		50.6%	49.4%					47.9%	52.1%			
理 学 部	2,061	1,157	545	165	53	141	301	159	116	19	1	6
	検 35 他 3	検 16 他 2	検 6	検 3	検 3	検 7 他 1	検 1 他 1	検 1 他 1				
		56.1%	43.9%					52.8%	47.2%			
医 学 部	636	242	111	39	26	218	100	42	41	9	2	6
	検 11 他 2	検 4		検 3		検 4						
		38.1%	61.9%					42.0%	58.0%			
薬 学 部	508	279	122	29	12	66	81	44	30	6		1
	検 2	検 2										
		54.9%	45.1%					54.3%	45.7%			
工 学 部	3,072	2,011	844	137	22	58	961	559	357	34	5	6
	検 11 他 2	検 3	検 2	検 1	検 2	検 3	検 3 他 1			検 1	検 1 他 1	検 1
		65.5%	34.5%					58.2%	41.8%			
農 学 部	1,483	789	455	118	38	83	312	136	148	21	1	6
	検 19	検 8	検 2	検 2	検 2	検 5						
		53.2%	46.8%					43.6%	56.4%			
合 計	12,545	7,297	3,543	766	227	712	2,767	1,494	1,084	138	15	36
	検 129 他 16	検 52 他 5	検 19 他 2	検 16 他 2	検 11 他 4	検 31 他 3	検 11 他 3	検 4 他 1	検 3 他 1	検 2	検 1 他 1	検 1
		58.2%	41.8%					54.0%	46.0%			

〔外国学校出身者のための選考に係る入学資格取得年別調（外数）〕

学 部	志 願 者			入 学 者		
	総 数	現 役	浪 人	総 数	現 役	浪 人
		14.4～15.3卒	14. 3 以前卒		14.4～15.3卒	14. 3 以前卒
法 学 部	人 30	人 29	人 1	人 8	人 8	人
	他 30	他 29	他 1	他 8	他 8	
		96.7%	3.3%		100.0%	
経済学部	24	9	15	10	4	6
	他 24	他 9	他 15	他 10	他 4	他 6
		37.5%	62.5%		40.0%	60.0%

検…大学入学資格検定合格者
他…その他の入学資格取得者

平成14年度教育実習実施状況について

教育実習は教育職員免許法により、3単位の修得が義務づけられている。本学では事前指導として、実習参加学生に対して例年4月下旬にオリエンテーションを2日間行い（教育実習一般、民族教育、障害者教育、同和・人権教育）、更に各教科別に具体的な事前指導を行って教育実習に臨ませている。本学では附属学校を有していないため、教育実習は原則として学生の出身校（高等学校、中学校の何れも可）の協力を得て行っている。ただし、事情があって出身校で承諾を得られない場合には、京都市立学校（高等学校、中学校、養護学校）に依頼して実施している。

教育実習は府県により開始時期は異なるが、夏季休業期間を除いて5月上旬から11月中旬までの間に2～3週間が充てられ、全体の実習が終了した後、11月下旬以降、各教科別の事後指導が行われる。

単位認定は、教育実習校からの「教育実習成績報告票」、実習生が提出する「教育実習ノート」と事前及び事後指導の評価を勘案して教育学部において行っている。

平成14年度においては、全国40都道府県の国公私立高等学校118校、中学校22校、養護学校3校の協力を得て実施した。

なお、本年度の特徴として、

- 1) 前年に比較して教育実習参加者が約40名増加し、一昨年の状態に戻った。

2) 「介護等体験」制度（中学校教員普通免許状の取得希望者に、盲・聾・養護学校で2日間、保育所を除く社会福祉施設等で5日間、計7日間の体験を行うことが義務づけられた制度で、本学では2回生から実施可能。）の希望者増大がある。

特に介護等体験制度実施初年度（平成10年度後期）に2名の希望者が、平成11年度では21名、平成12年度では61名、平成13年度では49名（前期：28名、後期：21名）、平成14年度では66名（前期：43名、後期：23名）となった。学生1名について2つの窓口（特殊教育諸学校と社会福祉施設等）が必要であり、学生の出身都府県での実施を原則としているため、事務処理に困難をともなった。

また、体験参加学生数の増加にともない、種々の問題点も指摘され、制度運用に課題を残している。

さらに、本学の現状では教員免許状取得希望者（とりわけ中学校教員免許状取得希望学生）の実情把握が困難であるため、教育実習及び介護等体験を円滑に運営するには、各学部・研究科の協力が今まで以上に求められる。

関係各位のご理解とご協力をいただき、制度運営にあたりたい。
（教職教育委員会）

1. 学部、研究科別実習実施校（京都市立校及び出身校）

区 分	学 部 ・ 研 究 科 名															計
	総入	文	教	法	経	理	医	薬	工	農	人・環	エネルギー	情報	生命	地球	
参加申込者	9	(2) 52	(1)〈4〉 34	(1) 2	(1) 3	(10) 53	(1) 1		(2) 20	(2) 22	(4) 4		(1) 1	(1) 1	(1) 1	(27)〈4〉 203
京都市立中学・高校		1	4		(1) 1	2										(1) 8
京都市立養護学校			3			(1) 1										(1) 4
取り止めた者					(1) 1											(1) 1
上記区分終了者		1	7		(1) 1	2										(1) 11
出身中学・高校等	9	(2) 51	(1)〈4〉 27	(1) 2	2	(9) 50	(1) 1		(2) 20	(2) 22	(4) 4		(1) 1	(1) 1	(1) 1	(25)〈4〉 191
取り止めた者		2					(1) 1									(1) 3
上記区分終了者	9	(2) 49	(1)〈4〉 27	(1) 2	2	(9) 50			(2) 20	(2) 22	(4) 4		(1) 1	(1) 1	(1) 1	(24)〈4〉 188
実習終了者	9	(2) 50	(1)〈4〉 34	(1) 2	(1) 3	(9) 52			(2) 20	(2) 22	(4) 4		(1) 1	(1) 1	(1) 1	(25)〈4〉 199

（注）枠内の（ ）は大学院生、〈 〉は科目等履修生で何れも内数。

2. 校種別実施状況

区 分	学部・研究科名															計
	総人	文	教	法	経	理	医	薬	工	農	人・環	エネルギー	情報	生命	地球	
中学校	2	6	(1)〈1〉 10			3			2							(1)〈1〉 23
高等学校	7	(2) 44	(3) 21	(1) 2	(1) 3	(9) 49			(2) 18	(2) 22	(4) 4		(1) 1	(1) 1	(1) 1	(24)〈3〉 173
養護学校			3													3
合 計	9	(2) 50	(1)〈4〉 34	(1) 2	(1) 3	(9) 52			(2) 20	(2) 22	(4) 4		(1) 1	(1) 1	(1) 1	(25)〈4〉 199

(注) 枠内の () は大学院生, 〈 〉 は科目等履修生で何れも内数。

本年度の教育実習は、全国40都道府県の国公私立高等学校118校、中学校22校、養護学校3校の協力を得て、実施した。

訃報

このたび、出口勇藏^{でぐちゆうざう}名誉教授、山縣弘忠^{やまがたひろただ}名誉教授が逝去されました。

ここに、謹んで哀悼の意を表します。

以下に両名誉教授の略歴、業績等をご紹介します。

出口 勇藏 名誉教授



出口勇藏先生は、4月2日逝去された。享年94。

先生は、昭和8年京都帝国大学経済学部を卒業、大学院で経済思想史を学ばれた後、助手、講師、助教授を経て、同23年教授に就任、経済学第二講座を担当された。この間、京都大学評議員、経済学部長をそれぞれ二期務められ、大学の管理運営に貢献された。昭和47年停年により退官され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。

本学退官後は、名城大学教授、京都薬科大学教授を務められた。

先生のご専門は経済学史であったが、経済哲学と

社会思想史にも造詣が深く、フランス啓蒙の経済思想・進歩思想の研究『経済学と歴史意識』（昭和18年）は版を重ねた名著として知られる。またウェーバーの方法論の研究、トーニーの『宗教と資本主義の興隆』の翻訳と紹介、歴史学派とメーザーやヘルニクなどのロマン派の研究、アダム・スミス研究など、先生の研究は、フランス、ドイツ、オーストリア、イギリス、中国等の近代思想の全般に及ぶ広大かつ深遠なもので、それはわが国の経済学史・社会思想史の研究に対する大きな貢献であった。

また先生は、日本学術会議会員、経済学史学会代表幹事を務められるなど、わが国の学術の振興にも尽力された。

(大学院経済学研究科)

山縣 弘忠 名誉教授



山縣弘忠先生は、4月3日逝去された。享年73。

先生は、昭和28年京都大学農学部農学科を卒業、同大学院で学ばれた後、農学部助教授を経て、昭和45年に教授に就任し、育種学講座を担当された。平成5年停年により退官され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。この間、農学部附属農場

長および同亜熱帯植物実験所長、京都大学放射性同位元素等管理運営委員会委員長を務められ、大学の管理運営に貢献された。

本学退官後は、近畿大学生物理工学部教授を務められた。

先生は、突然変異の利用、量的遺伝、種属間交雑、有用遺伝資源の開発など植物育種学の広い分野において数多くの優れた研究業績を残され、国内外の農業、育種事業、育種学、遺伝学の発展に指導的役割

を果たされた。平成2年には、「突然変異の誘発と利用に関する遺伝育種学的研究」で、日本農学賞および読売農学賞を受賞された。先生が作出されたイネ突然変異体のコレクションには、学術上きわめて貴重なものが多く含まれており、その一つの変異体の分析から、トランスポゾン的一种 MITE がゲノム中を転移するという大発見が動植物を通じて初めて

なされている。

また、先生は、日本育種学会において会長、副会長の要職をそれぞれ4年間務められたほか、日本農学会評議委員、国立遺伝学研究所評議委員などを歴任され、わが国の学術行政にも貢献された。

(大学院農学研究科)

話題

原子炉実験所、創立40周年記念オープンキャンパスを開催

原子炉実験所では、創立40周年記念オープンキャンパスを構内の100本以上の桜の満開時期と重なった4月2日（水）から6日（日）にわたって開催し、期間中900名を超える多数の来所者があった。

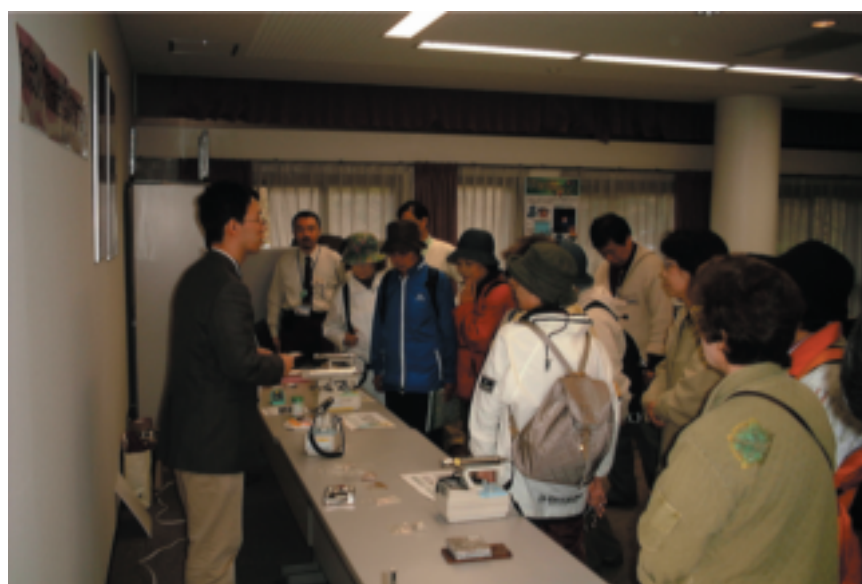
2日（水）から4日（金）の各日、原子炉実験所教授による記念講演会が行われ、併せて原子炉実験所創立40年の歴史のあゆみとして、開設当時の貴重な写真や新聞記事を含むパネル等を展示した「展示コーナー」も開設された。

また、5日（土）に行われた毎年恒例の「一般公開」では、「ビデオ上映コーナー」や所員の案内による研究用原子炉（KUR）等の施設見学のほか、

「科学実験体験コーナー」も開設した。その中でも「放射線の足跡を見る」というテーマで行った霧箱実験が特に好評を得た。

6日（日）の最終日に行われた、「桜公開」は好天にも恵まれ、近隣住民を中心に多数の来所者があり、昼食時には構内各所で桜の下、弁当を広げている光景があちこちに見られ終日にぎわいを見せた。

原子炉実験所では、今後ともこのような多数の方が参加できるイベントを充実させ、原子力と科学の世界を身近に感じてもらえる場を提供していく考えである。



お知らせ

平成15年度創立記念行事音楽会の開催

本学では、6月18日の創立記念日を祝し、下記日程のとおり音楽会を開催いたします。
本学学生・教職員の来聴を歓迎します。

名 称 ～美貌とダイナミズムの実力派～
三 船 優 子 ピアノコンサート
演 奏 者 三 船 優 子 (ピアノ)
日 時 平成15年 6 月17日 (火) 開場：午後 5 時30分
開演：午後 6 時30分
終演：午後 8 時30分 (予定)
会 場 京都コンサートホール (京都市左京区下鴨半木町 1 - 26)
プログラム
《第一部》(約40分)
バッハ : イタリア風協奏曲 ヘ長調 BWV.971
ショパン : バラード第1番 ト短調
: 夜想曲 OP.62-2
: 幻想即興曲
リスト : ラ カンパネラ
--- 休憩 (20分間) ---
《第二部》(約40分)
プロコフィエフ : シンデレラからの6つの小品 作品102より
シンデレラと王子のワルツ
争い
愛をこめて
ブルース・スターク : ウィングド
ガーシュイン : ラプソディー・イン・ブルー



演奏者略歴

三 船 優 子 (ピアノ)

幼少の頃からニューヨークに育ち、ジェローム・ローエンタール氏に師事。帰国後、井口秋子、奥村洋子、安川加寿子らに師事する。1988年桐朋学園大学在学中、第57回日本音楽コンクールで第1位を受賞。併せて野村賞、井口賞、河合賞を受賞。翌年、同大学を主席で卒業。赤坂御所における桃花堂コンサートにて御前演奏を行う。その後、国内各地でピアニストとして活動開始。1990年には文化庁海外派遣研修員としてジュリアード音楽院に留学、名教師マーティン・キャンニオン及び室内楽のサミュエル・サンザースの両氏と出会い指導を受ける。1991年にはロス・アンジェルスにてアメリカデビューを果たしL.A.TIMESにて絶賛をうける。

同年10月、フリーナ・アワーバック国際ピアノコンクールで優勝。カーネギーホール、リンカーンセンターなどでリサイタルを行い全米で多くの話題を集める。92年5月、ジュリアード・ソリスト・オーデションに優勝。同年9月帰国し、本格的に日本での演奏活動を再開する。

リサイタルはもとより、国内外の主要オーケストラとも共演を重ねる。

これまでに、CDアルバム「リスト/巡礼の年 第2年イタリア」、「リスト作品集/メフィストワルツ」、「ラプソディー・イン・ブルー」等を発売。

96年1月にはモスクワ・フィルハーモニー交響楽団(シナイスキー指揮)と協演。

97年には東京・御茶ノ水のカザルスホールにて「HASEKO CLASSICAL SPECIAL」/三船優子煌くピアノイズム」と題したセルフ・プロデュースによるコンサートシリーズを行い、好評を博した。さらに95年4月から2000年3月まで、FM横浜のラジオ音楽番組「オーセンティック・ジャーニー」「ラ・ゴンドリエラ」のパーソナリティーとしても活躍。

最近では人気クラリネット奏者の赤坂達三氏とのデュオやトリオのコンサートを始め、日本在住のアメリカ人コンポーザーピアニスト、ブルース・スターク氏の曲を演奏会などで取り上げる。2002年12月には同氏の作品をタイトルにしたアルバム「ウィングド」(キングレコード)を発売し、音楽雑誌等で高い評価を得ている。音色の美しさとスケールの大きな力強い演奏はつねに観客をとりこにし、バッハからガーシュインまで、古典から現代音楽に至るそのレパートリーの幅広さにも定評がある。

とりわけアメリカの作曲家の作品とロシア音楽への思い入れが深く、本人の得意とするところである。

- 備 考
1. 入場無料 (入場の際は、本学学生証または職員証を呈示してください。)
 2. プログラムは当日会場で配布します。
 3. 定員は1,600名先着順とします。演奏中は入場できません。
 4. 問い合わせ先：学生部学生課課外教養担当 TEL 内線2511

(学生部)

桂キャンパスへの工学研究科移転に伴う本部構内の交通規制について

本部等構内交通委員会

大学院工学研究科の桂キャンパスへの本格的な移転が開始されます。まず、化学系専攻及び桂インテックセンター関係が、6月23日（水）から8月下旬の間、電気系専攻関係が、8月下旬から9月下旬にかけて、移転します。

この移転による物品等の搬出に伴い、次のとおり、本部構内の大幅な交通規制が行われます。教職員、学生及び一般の方々には、通行等ご不便をおかけすることとなりますが、ご理解とご協力をお願いいたします。

なお、この移転に伴う交通規制により、本部構内の駐車スペースが大幅に減少しますので、教職員及び学生におかれては、自家用自動車による通勤・通学を極力自粛されるよう強く要請いたします。

<化学系移転時期 6月23日～8月下旬>

- ・構内東側エリアへは北門から入構し、東門から出構。
- ・構内西側エリアへは正門から入出構。

※移転搬出車両は、裏門を専用出入口とし、裏門から4号館の周囲道路を「搬出車両専用通行区間」とする。



＜電気系移転時期　8月下旬（25日予定）～9月下旬＞

- ・正門入口から、構内の東側エリアと西側エリアに分かれて入出構。
 - ・構内の北東側建物（メディアセンター等）への関係車両は、交通整理員の誘導により、3号館北側道路を通行。
- ※移転搬出車両は、北門を専用出入口とし、北門から3号各館等の周囲道路を「搬出車両専用通行区間」とする。



平成15年度原子炉実験所の学術公開日について

原子炉実験所では、平成15年度上半期分の学術公開（施設公開）を以下のとおり実施いたします。

1. 日 時
 - 5月12日（月）
 - 6月2日（月） 時間は各日とも
 - 7月7日（月） 午後1時～4時
 - 8月4日（月）
 - 9月8日（月）
2. 申込方法

希望日の前々週の水曜日までに団体名、人数、責任者及び連絡先を記載した文書（書式任意）でお申し込みください。

（郵送，FAX，E-mail，いずれも可）
3. 申込・問合せ先

〒590-0494 大阪府泉南郡熊取町野田
原子炉実験所 総務課庶務掛

電話：0724-51-2310 FAX：0724-51-2600
E-mail: shomu@rri.kyoto-u.ac.jp
詳細はホームページをご覧ください。
http://www-j.rri.kyoto-u.ac.jp/koukai/g_kokai.htm

日誌 2002.3.1 ～ 3.31

- | | |
|---------------------------------|------------------------------|
| 3月1日 医療技術短期大学部入学者選抜試験
（2日まで） | 17日 医療技術短期大学部卒業式 |
| 4日 評議会 | 18日 評議会 |
| 〃 大学院審議会 | 24日 修士学位授与式 |
| 〃 教育課程委員会 | 〃 博士学位授与式 |
| 10日 学生部委員会 | 25日 卒業式 |
| 11日 評議会 | 26日 附属図書館商議会 |
| 13日 入学者選抜学力試験（後期日程）
（14日まで） | 27日 国立大学の法人化に関する説明会
（第3回） |

編集後記

カリキュラム改革で忙しかった教科主任の任期も3月末で終わり、ホッと一息。暖かくなって桜が咲き、イラク戦争も峠を越した頃は、「雑用から解放されてサア研究に集中できるぞ」と明るい展望を抱いていました。事態が一変したのは、4月18日の広報委員会で『京大広報』部会の世話人に指名されてからです。私自身、20年以上大学で仕事をしていますが広報の仕事をしたことはなく、『京大広報』を読んだことはおろか、その存在さえ知りませんでした。そんなわけで昨年度分を見せてもらいましたが、なんと毎月発行しているではありませんか。「こんなの引き受けたら大変だ」と抵抗を試みましたが、それも虚しく、この編集後記を書く羽目になってしまいました。

引き受けてしまったからには仕方ありません。これからは大学にとっても広報活動が大切になるでしょうし、3月号の編集後記にある「旧編集部会からの提言」を実行に移しながら、多くの人に読まれ（既に私という読者が1人増えました）、親しまれる紙面づくりをしていこうと思っています。読者のみなさんからの積極的なご提言・ご投稿を期待いたします。（成生記）

【訂正】

前号（No.578）当欄掲載の放射線生物研究センター長交替の記事（1443ページ）中、「放射線システム生物部門担当」は「ゲノム動態研究部門担当」の誤りでした。お詫びして訂正いたします。